

『遊行經』 mahāparinibbāna-suttanta の佛滅記述について

——阿含文學における信仰の論理——

橋 本 芳 契

過去およそ百年間における佛教の新研究とそれにとりともなう佛教近代化へのあゆみにおいて、阿含部經典の開明と啓發が占めた地位はまことに大きい。阿含研究はおのずとひとびとの心をふかくブツダ釋尊に近づけまた根本佛教の確信へとみちびいた。釋尊に近づくとはその人格精神にふれることであり、根本佛教への確信とは眞にふかく大乘佛教の根基を知ることではなければならない。しかるに釋尊の生涯に關する記述、つまり「佛傳」として現在われわれに知らされたものは、

とされる“mahāparinibbāna-suttanta”（大バリニツパーナ經^③）と對應するところ最も多い北傳涅槃經であるから、その宗教的意義をさぐり阿含部經典のもつ信仰の論理を明らかにしようとすることは、佛教の思想的根據をその根本聖典のうちに問いただすことになるからである。

大小乗にわたって相當數にのほっているが、いまそのうち小乗に屬するもので、しかも阿含部中の「長阿含」にふくまれた『遊行經』をとりあげて、その宗教的意義についてしばらく考えてみたい。ただし『遊行經』^①は、佛傳中でも釋尊の最晩年期、ことにその入滅前後の模様を詳細記述したものととして作品構造上も内容的にもユニークであり、他方南傳中、釋尊の同期のことをしるしたものとしてはほとんど唯一の經典

釋尊の入滅前後のことを詳記した小乘經典としてはこれら『遊行經』『大バリニツパーナ經』^③以外にも四種の經律と三種の斷片資料が存するが、一體これらの經典や資料はいずれも釋尊入滅後につくられたものに相違なく、したがって、單に客觀的史實的記錄ばかりでなしに、入滅後になつて釋尊の生前を回顧し、さらには肉身現身の釋迦牟尼世尊をうしなつてあらためて釋尊の全生涯を逆觀し、これを追憶追念するの情にいでたものが加わっているであろう。それについて『遊行經』第二に「四處巡禮」のことがでている。いわく、

爾時阿難、偏露^②右肩、右膝著^④地、而白^⑤佛言。世尊、現在四方沙

門・耆舊、多知・明鮮^三經律・清德高行者、來觀世尊。我因得^三禮敬・親觀・問訊。佛滅^レ度後、彼不復來、無所^レ瞻對。當^二如^レ之何。

佛告^三阿難^一。汝勿^レ憂也。諸族姓子、常有^二四念^一。何等四。一曰、念^二佛生處^一、歡喜欲^レ見、憶念不^レ忘、生戀慕心。二曰、念^二佛初得道處^一、歡喜……三曰、念^二佛轉法輪處^一、歡喜……四曰、念^二佛般泥洹處^一、歡喜……。

阿難、我般泥洹後、族姓男女、念^二(一)佛生時功德^一如是、(二)佛得道時神力^一如是、(三)轉法輪時度^レ人如是、(四)臨滅度時遺法^一如是、各詣其處、遊行禮^二敬諸塔寺^一已、死皆生^二天^一。除^二得道者^一と。

これは佛傳にいわゆる「八相成道」中、(一)降誕、(二)成道、(三)轉法輪、(四)入涅槃の四相の表示された場所をさすものであり、その各處につけ順次功德・神力・度人・遺法の四徳を念じて往詣、遊行、禮拜させようとしたことは、釋尊の全生涯がこれらの區切りとその意義において見られるに至ったことを意味するものであつて、すでに釋尊の生涯に關する單なる歴史的客觀的記述を超えているものである。八相の他の四は、右の(一)降誕の前に下天・託胎の二をかぞえるのと、(一)降誕と(二)成道との間に出家・降魔の二をかぞえるのとであるが、あとの四相がまえの四相に比して教理的意義のひくいことは言うまでもない。そのみならず前四相中、とりわけ(二)の成道一相が重要であり、全體において中心的意義をもつからこ

そ「八相成道」という呼びかたまでできたのである。

ところで南傳にしても北傳にしても入涅槃(佛滅)を中心にして説く諸經は、何れも「般泥洹」parinibbānaもしくは「大般涅槃」mahāparinibbānaを經題としたのに、『遊行經』にかぎって「遊行」caronā or carakāを經名としたのはなぜであらうか。元來、parinibbānaは「束縛を脱している」parinibbutaという意味の語として、もとは全く純精神的なものを指し、成道のごときはまさに般涅槃であつたのである。『大バリニツパーナ經』第四章第三節につきの一句がある。

Idam avoca Bhagavā, idam vatvā Sugato aḥāparam etad avoca Saṁhā :

‘Sīlam saṁādhī paṇṇā ca vimutti ca anuttarā, Anubuddhā ime dharmā Gotamena yasassinā. Iti Buddho abhināya dhammam akkhāsi bhikkhunam,

Dukkhas’ anta-karo Saṁhā cakkhumā parinibbuto’ ti.

(譯) これを世尊は言ひ、これを善逝は言ひ、さらに師はかく言いたもうた。

「戒と定と慧と無上の解脱と、

これらの〔四つの〕法が譽高きゴータマによつて覺られた。

ブッダはこのように覺つて、比丘等には法を説いた。

苦を滅した具眼の師は般涅槃す(＝束縛を脱している)と。

この最後の一語は明らかに「成道」を指したものである。佛傳のうえで、「成道」は「轉法輪」を介して「入涅槃」につながっているが、入涅槃は勝義において成道とひとしいとしてもそれによって轉法輪（説法）が一段落するという歴史的實義からは、そこに教理上の辯證がある。この教理上の辯證は究極において信仰上の行證となつて完結すると考えられるのであるが、『遊行經』としては「惡魔」の登場、ならびにブツダによるその降伏——いわゆる「降魔」という文學表出によつてこのことを表明している。

すでにして釋尊はマガダ國の王舍城外、靈鷲山をあとにし、道を北にたどり、ガンジス河を越え、ヴァツジ族のヴェーサーリーに到り、さらに西に進んで、おそらく最後のにはコーサラ國の舍衛城外、祇園精舍にたどりつこうとされたものであつたろうが、八十の老齢いかんともしがたく、まして途中パーヴァー村で鍛冶工の子チュンダの捧げた供物茸が障つて發病され、その苦にたえつつ辛うじてクシナーラーまで歩んだだけで、そこでついに入滅されたのである。『遊行經』には、釋尊が發病されてまもないとき阿難に對し、「諸有の、四神足を修し、多く修習し、行、つねに念じて忘れざるものは、意の所欲にありて、一劫有餘を死せざるを得べし。阿難よ、佛は四神足、已に多く修行し、專念して忘れず。意の所欲に在りて如來は、一劫有餘を止むべし。世の爲に冥を

除き、饒益する所多く、天人は安を獲ん」とのべられたが、その時阿難はこれにこたえ得ず、かくすること三度、しかもついに佛意が阿難に通じなかつたと記されている。この「一劫有餘」というものが實は「轉法輪」の時期に相當する。このあと阿難は魔のため蔽われ、朦々として悟らず、佛が三たび現相しても請うことを知らない。やがて佛は阿難にその場を避けさせる。その隙に魔の波旬が姿をあらわして、「佛意無_レ欲、可_レ般涅槃、今正是時」と勧め、佛はこれを拒み、「我自知_レ時。如來今者、未_レ取_レ涅槃。須_レ我諸比丘集。又能自調、勇悍無_レ怯、到_レ安樂處、逮_レ得_レ已利、爲_レ人導師、演_レ布經教、顯_レ於句義、有_レ異論、能以_レ正法、而降_レ伏之。又以_レ神變、自身作_レ證」とのべて、今こそ生涯に教化し得なかつた四衆大衆を接得するときであると宣言する。惡魔は、かさねて佛に向い、「むかしボダイ樹下に成道したもうた時にわれ（惡魔）は如來に對し般涅槃を勸請した。その時も如來は、いまと同じことを言われた」と言つて入滅を迫ると、釋尊は、「この後三ヵ月にして滅度を取る」と約束され、魔は佛語を信じて去つた。魔が去つてほどなく佛はチャーパーラ塔で定意三昧に入り、命住壽を捨てしめ、このとき大地震がおこつて人々はおどろいたとある。

こうした一段はきわめて空想的文學的な内容の如きである。およそ經典に對し歴史的に實證され得ることのみを残

し、他はすべてこれを捨て去ろうとするならば、涅槃部の諸經のごときは、その大方をうしなうであらう。おもうに歴史的實證の名でさぐられることは佛身觀のうえでは應身佛の範圍でのものである。その應身 *nirmanakāya* ということさえ、もとふかい教理思想にもとづけられて言うことである。

佛傳は單に釋尊の生涯に關する歴史的記述やその蒐集だけから得られるものでない。そこには宗教的信仰の對象となつた釋尊の人格につけてのふかい哲學的冥想と宗教的救済の思念がつよくつきまとう。その意味では、『遊行經』がその最初にのせた「七不退法」をはじめとして、「法鏡の説」・「自燈明・自歸依の教」・「四大教法」の諸説、いずれひとつにも實踐的趣意が大きくあふれ出ているのである。如來最後の教誡は、「無爲^③放逸」であつたが、げに釋尊は不放逸のゆえにこそ自ら正覺をいたされ、無量の衆善もこの不放逸によって得させられたのであつた。

『大パリニッパナ經』第六章には、釋尊の入涅槃に際し、阿難が歌つた偈がのせられている。次のごとくである。

‘Tadā ‘si yaṃ bhimsanakaṃ tadā ‘si lomahansaṇaṃ
Sabhākara-varūpete Sambuddhe parinibbute’
(譯) そのとき恐怖があつた、

そのとき身の毛がよだつた。

一列の慈悲を具えたもう等正覺者が

『遊行經』 mahāparinibbāna-suttanta (橋 本)

般涅槃に入りたもうたとき。

そしてこれに對應する『遊行經』に出ている異の比丘の頌は是身如泡沫、危脆誰當樂。佛得金剛身、猶爲無常壞。諸佛金剛體、皆亦歸無常。速滅如少雪、其餘復何異。というものである。

阿難にしても異の比丘にしても、なお信仰の上に餘地のあることを示しているが、彼らはそれ故にこいよいよ如來の慈悲に依り、諸佛の眞實心に歸して自らの濟度を求めたのである。これを要するに阿含部の諸經には史實と教理と信仰の三者がそれぞれに密着しているのであり、單に阿含佛教とか阿含經典と言えばそのうち教理面を主とすることになるのであり、信仰もその論理面では廣義の教理にふくまれるのであつたが、信仰の實際からすれば釋尊の人格、ひいては佛身への思慕と佛心への悲戀がその根柢となるので、しばらく宗教感情の流露としての文學面を主とし、あわせて史實の確かさがもとより信仰行證の基底たることを述べたのである。^④

1 大正藏、第一卷。一一頁上——三〇頁中。長阿含の第二——

四卷。後秦の弘始年間に佛陀耶舎と竺佛念とが共譯。

2 The Dīgha Nikāya, ed. by T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter. vol. II. London, The Pali Text Society, 1947. pp. 72-168. その第一六經。

3 西晋の白法祖が譯した『佛般泥洹經』二卷(大正藏、第一卷。

『遊行經』 mahāparinibbāna-suttaṇṭa (橋 本)

- 一六〇頁中——一七五頁下)、譯者不明の『般泥洹經』二卷(同上。一七六頁上——一九一頁上)、東晋の法顯の譯した『大般涅槃經』三卷(同上。一九一頁中——二〇七頁下)および義淨三藏譯『根本說一切有部毘奈耶雜事』第三五——四〇卷(大正藏、第二四卷。三八二頁中——四一一頁下)と「梵本」斷片(四種。トゥルフアン發見)「チベット本」ならびにN・ダット出版ギルギット地方發見梵本資料(これらについては中村博士『ゴータマ・ブッダ』一七四——五頁參照)。
- 4 大正藏、第一卷。二五頁下——二六頁上。
- 5 ibid., p. 123, ll. 5-12.
- 6 吾己老矣、年粗八十。譬如下故車、方便修治、得有三所至。(同。一五頁中)。
- 7 8 同。一五頁中——下。
- 9 同。一一頁中——下。 10 同。一三頁中。
- 11 同。一五頁中。 12 同。一七頁中——一八頁上。
- 13 同。二六頁中。
- 14 ibid., p. 157, ll. 18-19.
- 15 同。二七頁中。
- 16 「魔の波旬」は維摩經では持世ボサツを「萬二千の天女」で誘うて失敗し却つて「無盡燈」説への機縁になり、「異の比丘」頌は同經方便品説の基底になつた。そこに阿含から大乘への信仰論理の相續と展開がある。維摩は遊行經の延長であらう。
- [文部省科學研究費による昭和38-39年度綜合研究での研究成果の1部]

執筆 者 紹 介 (二)

- 八力宏 喜(北海道大學大學院)
- 田村庄司(東洋大學卒)
- 橘堂正弘(龍谷大學大學院)
- 小島誠一(京都大學卒・高校教諭)
- 河村孝照(東洋大學助手)
- 石川良昱(花園大學助教)
- 增原良彦(氣象大學講師)
- 花本泰堅(九州大學大學院)
- 今西順吉(東京大學大學院)
- 高木神元(高野山大學講師)
- 天野宏英(東北大學講師)
- 菅沼晃(東洋大學助手・講師)
- 戸崎宏正(筑紫女學園短期大學教授)
- 神子上惠生(龍谷大學佛教文化研究所助手)
- 篠田正成(九州大學助手)
- 久保繼成(東京大學大學院)
- 戸田宏文(九州大學助手)
- 立花孝全(東京大學大學院)
- 村中祐生(大正大學助手)
- 鍵主良敬(大谷大學助手)
- 小林實玄(龍谷大學助手)
- 山田行雄(龍谷大學佛教文化研究所助手)
- 柴田泰(北海道大學助手)
- 竹田暢典(大正大學講師)